

北海道薬学教育機関の歩み

旧職員 青木 勇

1. 北海道大学医学部薬学研究科設立期成会

北海道に薬学教育機関を設置したい希望は古くからあった。秋山愛生館社長秋山康之進氏が同社の社内報「愛輪」に寄せられた、“北大薬学科設置の思い出”の記事に拠れば、北海道の薬学教育機関設置の運動が起きたのは昭和の初め鳩山文部大臣の時に、木下成太郎代議士を校長として、私立薬学専門学校を設置すべく準備を進めたが、許可までに至らなかった。

また同じ昭和の始め頃、北大の生理学教室で薬学科設置を唱えたが、予算等の関係で具体化するに至らなかったと言う話である。

戦後になると東大、京大などの旧制の薬学科は新制大学に切り替わり、阪大、九大は新制大学への移行を機に新たに薬学科を医学部に設置した。

こうした状況から、北海道でも薬学教育機関を設置しようとする動きが次第に活発になってきた。その口火を切ったのは北海道薬剤師協会である。道内には薬剤師教育機関がなく、薬剤師にする為に多くの子弟が、遠く仙台、東京等に送られていた。当時子弟を含め約 400 名程が津軽海峡を渡って教育を受けていたと推測され、これを道内に留めて教育を受けられたらと、薬剤師協会が希望するのも無理からぬ所である。

また北海道衛生部としても道内保健所薬剤師、衛生行政に司る薬剤師の確保、更には北海道開発の一環として、薬学研究者の養成とその活躍を求めていたので、薬学教育機関の設置には諸手を挙げて賛成し、薬剤師協会の発議に協力した。

最初は北海道の地域的要望とした為に、道立札幌医科大学に設置する方向で話が進んだ。昭和 24 年に薬学科設置の陳情が北海道知事田中敏文氏に対して正式に提出され、同年道議会は要望を認め札幌医科大学に設置を許可した。ところがその当時は札幌医科大学には教養部がなく、北大医学部医進コースと一緒に北大教養部で教育されていた。その為薬学科を設置する為には独自に教養部を設置しなければならず、新校舎の建設、内部設備、職員の確保など、その資金が 4～5 億必要になった。

この設立資金を北海道の地方財政の中から捻出する事は、大変難しい事が大きな障害となり、道議会としても一度は許可したが、資金面の具体策が無く札幌医科大学に薬学科設置の案は一頓挫した。しかし幸いにもその頃、北大医学部某教授から北大に薬学科を設置してはどうかの声が起こり、北大なら資金面の心配も軽減され、設立資金何千万円かを地元が負担すれば、あとは国庫資金にお願いする事が出来る。また当時北大病院の新築計画があり、北大へ設置する機運が急速に

高まった。

前述の秋山康之進氏の回想によれば、昭和 28 年 2 月 26 日、薬事会館において北海道薬剤師協会、卸薬業組合、小売薬業組合、製薬メーカー等北海道の薬業関係団体全体で、薬学科設立期成会を組織し、直ちに行動を開始したとある。具体的には 28 年 7 月 22 日、文部省大学学術課長春山氏が来道し、北海道庁、薬事関係団体の要人と会談し、事情を調査している。春山課長は全国的には薬剤師は過剰気味で、薬学教育機関の新たな設置は必要ないが、北海道という地域に限定して見るならば薬剤師は不足しており、薬学教育機関の新たな設置は必要である事を認めた。

春山課長の尽力もあって文部省省議も通過した旨、8 月 25 日に通知を受け、大蔵省との折衝が必要になったと述べている。

北海道薬剤師協会誌などの記録によれば、昭和 28 年 9 月 26 日午後 2 時より札幌市薬事会館に於いて、北大医学部薬学科設置発起人会を開催した。発起人は全道各地薬業組合、同卸売業者、道薬剤師協会理事、監事、支部長、代議員などよりなり、当日の出席者は次の通りである。

愛沢重郎、玄番新三、長谷重信、岡島元治郎、谷黒莊平、秋山恒、斎藤国太郎、師尾護道、関谷広吉、西田富之助、大塚文男、安部初太郎、大西哲雄、森信、大宮兼蔵、相馬喜一郎、上光次郎作、橋作三郎、吉川与三太郎、山口松治、田瀬静江、矢野順三、山寺敏三、山形幸一、松谷利喜智、大塚茂助、柏木三郎、河内一郎、照本市蔵、朝倉穂積
来賓

島北大学長、安田医学部長、杉野目理学部長、稲垣衛生部長、林北大病院薬局長、中津道衛生部薬務課次席、谷本医学部事務長

この発起人会で、大西哲雄氏(道薬会長)は世話人を代表して次の様な挨拶をしておられる。「本道における薬育施設の要望久しく、既に道政界にも是認するところなるも、開発途上にある周囲の情勢は遺憾ながら容易にこれを許さず、然れども去る昭和 26 年第 10 国会にては、時運に従い、薬事法の改正あり、所謂医薬分業確立し、来る 30 年より実施のことは我が国保健衛生上、数段の前進を瞭かとせり、然るに時偶々北大医学部改築の議あり、この機会に政府当局又薬学科設置を認容の気配を示さるるに至りたるも、これをことごとく国庫に委ねるには財政上種々難点あるは想像に難からず、さりとしてこの好機を逸せんか、再びいつの日に来らんか、殊に北海道総合開発に伴う科学知識の啓発普及は資源開発、生産向上に重要な分野を負担すべく、殊に医薬品のごとき原料の豊富は、將に世界的雄飛を約束されるもの数種あり、その前途真に洋々たるものありて、往時のごとく本州依存は、本道の特殊事情に鑑み、誠に策を得足るものにあらず、この北大医学部薬学

科設置の絶好機運に吾人は、総ゆる努力を捧げ難関を突破し、将来の想をここに致し、これが完成を期せんとするものであり、江湖各位の御賛同を冀う次第であります。」

この世話人会でそれ迄の経過報告、北大医学部薬学科設置期成会規約などが審議され、第1条から第12条に至る条文が決められている。その中で期成会の役割を最も良く表している第2条と第3条について記載する。

第2条 本会は北大医学部に薬学科設置に協力し、その完成促進を期するを以て目的とする。

第3条 前条の目的達成上必要な資金を調達する為、募金を事業とする。その他目的達成上必要と認める事項。

これら規約について若干の質疑応答が行われた後、期成会設立総会が開かれている。設立総会における来賓の祝辞を2～3紹介しておく(薬剤師協会誌、S29年より)。

島北大学長

北大医学部に薬学科の設置に際し、薬剤師協会で期成会を作られた事は、百万の味方を得た心地がする。薬学科の必要は前から要望されていたが、遅れて今日に至った事は、他に仕事もあったが、吾々の怠慢もあった事をお詫びする。29年より設立に際し真に喜んでいる次第であるが、この頃では新規事業の際は、必ず文部省、大蔵省は地方の世論を聴く事になっている。税金の面から考えれば二重になる訳であるが、これは戦後大学が70にもなり、これを賄うには政府も相当困難である故国家財政を見て、地方の協力を要望するのである。援助が早ければ大蔵省に交渉するのに都合が良いので何分宜しく頼む。

安田医学部長

医、薬は車の両輪のごとく共に手を取って人類の疾病の予防治療に進むべきであり、薬学科の設置は前より望んでいたが、差し迫った用件が多くて今日に至ったが、医学部も最近改築する事になり、薬学科も出来る運びになった事は真に喜ばしい。

杉野目理学部長(2年後に北大学長)

問題は地元の熱意いかんである。次に良い先生を呼ぶことが必要である。大物一人では後は地元で育成する様にしたい。これには研究を第一とする将来ある若い人が良く、これ等の人は設備の良い所へ来るから、設備を完備したい。東大、京大の薬学科に人選の指名を依頼してある。

この外に稲垣衛生部長が挨拶されている。

この時予算審議も行われ、総額2,500万にのぼる期成会歳入、歳出予算が可決成立している。こうして期成会は大西哲雄道薬会長が、世話人代表から横滑りして会長になり、副会長に秋山、森、

秋野、照本、中保氏を会長指名で選び、常務委員、委員が発表されている。その顔触れを見ると北海道薬剤師会のお歴々がずらりと並び、北大薬学科設置期成会の重要な役割を果たした事が、当時の記録から伺い知ることが出来る。

11月7日午後2時から薬事会館に於いて役員協議会を開催し、下記のごとき寄付金の割り振りを決めている。

1. 医薬品、家庭薬製造業者	300万円
2. 道内卸売業者	400万円
3. 開局及び1号業者	1,000万円
4. 勤務薬剤師	100万円
5. 2、3号業者	300万円
6. 一般	200万円
計	2,500万円

募金は各支部に割り当て集金が行われている。また指定寄付金として免税取り扱いも行われている。

期成会はその後も活発な陳情を行い、目的達成のため努力を重ねられている。その経緯を曆調に記載する。

29年1月14日の閣議において、北大に薬学科設置の件が内定した。

2月17・18日、明治大学佐々木教授、東大秋谷教授が視学として来札。

3月3・4日、北大入学試験の募集定数を理類に40名増員して合格者を発表する事になった。

3月11日、文部省審議会並びに閣議において正式決定。

3月22日、初代主任教授予定者赤木満洲雄岐阜薬科大学教授が来札。

4月1日、北大医学部薬学科設置。

かくて期成会発足以来1年余りで設置する事が出来たのは中心的役割を果たした北海道薬剤師会の功績は多としなければならない。

4月20日、赤木満洲雄先生御夫妻札幌着任

4月26日、札幌グランドホテルにて北大薬学科設置を祝い、赤木先生御夫妻の歓迎会が催されている。

猶期成会活動の中で財政的に大きな役割を果たされた秋山愛生館社長の秋山康之進期成会副会長は自ら100万円を寄付して範を示し、東部薬工、西部薬工を歴訪して募金活動に尽力された。また秋山氏は新設された薬学科の学生に、返済無用の条件で年間50万円程支給し、勤労学生の

勉強資金に大きな支えを与えられた。この制度は 20 年程続けられたが、時勢も変わって打ち切られたとの事であるがその恩恵に預かった学生は、今では教授になり、会社重役になり、研究所長など薬学会、薬業界の重鎮として活躍しているとの事である。

2. 北海道大学薬学部

40 年 3 月に薬学部(学生定員 80 名)が設置され、医学部長の安倍三史教授が薬学部長事務取扱に就任、4 月には薬学科に加え製薬化学科が置かれ、同科に 41 年薬品合成化学講座、薬品有機化学講座が増設され、42 年に微生物薬品化学講座、薬品物理化学講座が増設され、6 講座の製薬化学科が完成し、44 年 4 月大学院薬学研究科に製薬化学専攻が増設された。

40 年 5 月赤木満洲雄教授が薬学部長に就任、次いで 41 年 7 月伴義雄教授が薬学部長に就任し 2 期 4 年務めた。その間 41 年 10 月薬学部本館工事を起工し、42 年 3 月一期工事(4,128m²)落成、43 年 3 月二期工事(4,003m²)落成している。

附属施設としては 42 年 4 月 RI 実験室(213m²、43 年 3 月 100m²増築)、42 年 12 月薬用温室移築工事完了、43 年 11 月同 47m²増築、47 年 11 月薬品庫(52m²)新築、51 年 5 月薬用植物園が設置された。

北大薬学科創設者であり元北海道薬剤師会会長であった赤木満洲雄先生は、40 年 10 月「北海道知事賞」を受賞され、43 年 3 月北大教授を最後に定年退職され、4 月には名誉教授の称号を授与された。

44 年北大学園紛争が起こったが、45 年 7 月には日本薬学会第 90 年会を札幌で開催、同年水野義久教授が伴学部長の後を受け薬学部長に就任され、48 年 7 月木村道也教授が薬学部長に就任している。

49 年 11 月薬学部創立 20 周年記念行事が赤木名誉教授等関係者多数を招いて盛大に行われた。

50 年 7 月石井信一教授が薬学部長に就任し、53 年 7 月から伴義雄教授が再度薬学部長に就任している。

伴先生は日本薬学会の会頭を 56、57 年(47 年は会頭代行)と 2 年務められ、59 年 6 月には、「昭和 59 年度日本学士院賞」を受賞、60 年 3 月定年退官され名誉教授になられたが、北海道大学学長に見事当選され、62 年 5 月学長に就任された。

54 年 4 月北海道大学機器分析センターが設置され、石井信一教授がセンター長に就任、56 年 7 月から 60 年迄薬学部長に就任していた上田亨教授が、62 年 4 月にセンター長に就任している。

薬学部長は小山次郎教授が 60 年 7 月から一期 2 年務め、62 年 7 月に現在の金岡祐一薬学部

長が就任している。

北大薬学科設立当時の水野義久教授は 58 年に、木村道也教授、三橋博教授は 60 年にそれぞれ北海道大学を定年退官し、北大名誉教授の称号を授与されているが、赤木満洲雄先生、林平三郎先生、故岩本多喜男先生、伴義雄先生と講座開設者が総て退官され、現在の北大薬学部の教授陣は金岡祐一、上田亨、米光幸、金子光、石本真、石井信一、小山次郎、小島陽之助、栗原堅三、柴崎正勝、大塚栄子(一期生)、鎌滝哲也、野村靖幸など第二世代の若い指導者の時代に移っている。

北海道大学薬学部創立 50 周年記念誌(2004 年 11 月発行)の「北海道大学の沿革」を再掲した。

同窓会 HP:2022 年 5 月 6 日公開